
MonsterHunter異聞『狩人伝』

伊達倭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Monster Hunter 異聞『狩人伝』

【Nコード】

N4239D

【作者名】

伊達倭

【あらすじ】

Monster Hunterの二次小説です。オムニバス形式を取っています。武器やアイテムなどは原作準拠ですが、深みを持たせようと、表記や設定に若干オリジナル要素が入っています。

狩人01 新米坊主

何故、ハンターになったのか。そう問われると、ハツシュは答える術がない。^{すべ}

憧れはあった。強大で凶暴なモンスターに、武器を片手に大立ち回りをするハンターは、子供心に英雄としてしか映らなかった。

野望もあった。大型の飛竜を狩ったとなると、多くの素材や報酬金が出る。ハツシュは権力を求める人間ではなかったが、一生を楽しく過ごすための金は、素直に求める性質であった。

少しの信念もあった。モンスターの素材は生活に役立つ。自分が一匹仕留めると、それが世界の誰かの役に立つ。それは素晴らしいことだと思っていた。

他にも、闘争心や狩猟本能。考えられる理由はいくつもある。しかし、いざモンスターと命のやり取りをしていると、そんな理由は全て消し飛ぶのだ。ハツシュは、初めての狩猟で、今までの自分がどんなに甘い考えをしていたのか、ようやく理解ができた。

岩陰に隠れて、周囲の気配を確認する。

波の音。木の葉が擦れ合う音。ランゴスタの羽音。

その中に、微かに聞こえる、青い狩人^{ランボス}の荒々しい吐息。かなり距離はある。

ハツシュは慎重に腰のポーチから支給品の応急薬を取り出して、一気に呷った。次に傷口に布をあてがい、止血をする。

訓練通りの動きはできている。盾とハンターナイフを握り直し、再びランボスの気配を探る。血の匂いで気付かれたのだろうか。ハツシュの隠れる岩陰に近づいてきているのがわかった。

「……ッ！」

息を飲み込み、体勢を整える。大丈夫だ、大丈夫だと自分に言い聞かせた。

草食竜と大して変わらないはずだ。動きは早い、直線的な攻撃しかできない。仮に噛み付かれても、振り払えば致命傷にはならない。狩るのは自分で、ヤツは獲物。決して立場を間違えてはならない。そう、俺は、ハンターだ。

意を決して、ハツシュは岩陰から躍り出た。密林の緑に、ランポスの青はよく目立つ。突然目の前に現れたハツシュを見て、ランポスは驚いたように一瞬、ビクリと身体を震わせた。

「だあッ！」

機を逃すまいと、ハツシュは一気に駆け寄り、大上段から飛び掛るようにランポスに刃を振り下ろした。しかし、間合いが半歩届いていない。ランポスの鼻先を掠めつつも、ナイフは虚空を切った。

「ま、だッ！」

何度も繰り返し練習した型を、身体が覚えている。さらに踏み込んで、振り下ろしきった刃を、今度は振り上げる要領で斬り上げた。確かな手応えを感じた途端、目の前から赤黒い雨が噴き出した。

「うわあっ!？」

それがランポスの血であるという判断が、咄嗟にできなかった。慌てて横に転がるように逃げつつ、ランポスの様子を伺った。

喉元から顎先にかけて、大きな傷ができており、血がどくどくと流れ続けていた。ランポスは痛みに激昂したのか、大きく口を開いて甲高い声で吼えると、ハツシュに向けて大きく飛びかかってきた。必死に転がって、ランポスの足の鉤爪を紙一重で避ける。しかし、追撃とばかりに噛み付いてきたのには反応が出来ず、左腕に鈍い痛みが走った。ハツシュは悲鳴を上げて、盾をぽろりと落とす。

「この、くそっ！」

必死に左腕を振るうが、ランポスも必死で食らいつく。ハツシュにとって運の悪いことに、ランポスの牙は肩に近い二の腕に食い込んでいる。うまく身体捌きでいなすことができない。

ハツシュの顔は痛みにゆがみ、瞳からぼろぼろと涙が零れだした。痛い。痛い。痛い。

痛みと死への恐怖がハツシュを震え上がらせ、僅かな判断力すらも失わせていく。気付いたときには、ハツシュは無闇にナイフを振り回すばかりだった。

しかし、それが幸いした。ハツシュ右手のナイフは、偶然にもランポスの肩口をぶすりと突き刺した。再びランポスの青い身体から血が吹き出して、ぐらり大きく体勢が崩れた。

ランポスは悲鳴に似た咆哮を放ち、ようやく左腕が解放される。ハツシュは我武者羅にナイフを引き抜くと、そのまま一気にランポスの眉間にめがけて振り下ろした。

一際甲高い、断末魔の鳴き声をあげて、ランポスはどさりと地に伏せ、事切れる。ハツシュはそれでもなお、ナイフを幾度と無くランポスに突き刺した。死後痙攣がおさまり、ランポスがぴくりとも動かなくなるまでハツシュは狂ったようにナイフを振り続けたが、やがて、血と涙や鼻水にまみれた顔を袖で拭くと、どかりと地面に寝転がった。

「は……は……は……」

足りない酸素に、呼吸が追いつかない。ハツシュは切れ切れの呼吸を整えようと、晴れ渡る青空の下、大の字に寝転がったまま、ゆっくりと目を閉じた。

自分は、何故ハンターになったのだろうか、瞑目したハツシュは自らに問いかけた。

幼い頃の憧憬か。或いは金のためか。信念もあつたろう。戦いや狩猟という根源的な欲求も考えることができる。

しかし、今のが、狩りだったのだろうか。ハンターとしての、第一歩だったのだろうか。

憧れていたような華々しい立ち回りなど、欠片も出来なかった。事切れたランポスは、滅多刺しにしまったので、素材を剥ぎ取ることできない。

信念など今はどうでもよくなってしまい、狩りへの本能よりも、

死への恐怖が勝った。ランポスに立ち向かえたのは、闘争心ではなく、あくまでも恐怖心からだ。足の速いモンスターから自分が逃げることができないと判ったために、生き残るために無我夢中で飛び掛っただけだった。窮鼠猫を噛むとはよく言ったものだ。

これが、ハンターなのか。これが、求めていたものだったのか。ハッシュは息が整って立ち上がるまで、ずっとそのことばかりを繰り返して考えていた。

「これじゃあ、ただの殺戮じゃあ、ないか」

ハッシュは呟いて、近くに落ちていた盾を拾い上げた。

事切れたランポスを見る。先ほどまで自分に喰らいついていた牙が、ハッシュの血で赤黒く染まっていた。だらんと伸びきった舌が、濁った色に変色している。ひどく薄気味が悪くて、たまらなく怖かった。

「ふうっ　ふうっ　！」

息が荒くなる。落ち着け、落ち着けと何度も心の中で叫んだ。

皮も鱗も、剥ぎ取ることのできる状態ではない。ならば、牙を剥ぎ取らねばならない。それはハンターの務めだと、ハッシュは自分に言い聞かせた。お互いが命をかけて闘ったのだ。もし負けて、救助が間に合わなければ、ハッシュはランポスの餌になっていた筈だ。自分は勝ったのだから、ハンターなのだから、報酬を受け取る権利がある。お互いの命を賭けたのだから、身体を利用する権利がある。何度も何度も、言葉を変えてハッシュは自分に言い聞かせた。

剥ぎ取り用の小型ナイフを鞘から取り出して、慎重にランポスの牙を挟り出す。使える牙は一对しかない。

たっぷり十分ほどの時間をかけて、ハッシュはランポスの牙を剥ぎ取り、鞘に収めた。

「悪く、思わないでくれよ。頼むから」

牙を抜き取られたランポスに、ハッシュはそれだけを言った。死肉はやがて、他の動物や植物の栄養となる。このまま放置しておくのが正しい作法である。

埋めることも考えたが、ハツシュはそのまま放置して、キャンプに帰ることにした。これも自然の摂理なのだと、無理矢理に納得した。

キャンプに戻り、成果をアイルに報告して、ハツシュは集会所へと戻った。

ランポス一頭。それが初めての狩りの成果だった。飛竜に挑む猛者が揃う集会所では、この成果では笑われることだろう。おまけに、身体はボロボロで、支給品も使い切ってしまった。

「おう、帰ったか坊主」

集会所の扉を開くと、顔見知りのベテランハンター達が酒を飲んでいるところであった。

「どうでえ、始めての狩りは？」

「はは、ひどい結果です」

取り繕うように、ハツシュは負傷した左腕を見せた。包帯でぐるぐる巻かれた腕を見て、ベテラン達は愉快そうに笑った。

「それ位の怪我はつきもんだぜ。それより、成果はどうだ。そこまです落ち込むってこたあ、ゼロか？」

「いえ……その、ほとんどゼロみたいなもんですけど。ランポスを一頭だけ」

ハツシュは恥ずかしくなって、顔を伏せた。きつと大きな笑い声が聞こえてくるのだろう。ハンターは職業柄、豪快な人物が多い。盛大に笑い飛ばされるならまだマシで、最悪ハンターなんかやめちまえと言われるかもしれない。今のハツシュにその言葉は辛い。しかし、ハツシュの予想とは裏腹に、聞こえてきた声は歓声であった。

「おうおう、やったじゃねえか。初めてで、しかも一人だったのに、よく逃げずに倒したもんだ」

「どれ。剥ぎ取りは上手く行ったんか？」

「え、あ、はい。一応、牙を」

「聞いたか。おい、みんな。この坊主、一発目でちゃんと剥ぎ取りまでしてきたそうだ！」

きょんとするハツシュに、周囲から大きな歓声と拍手が送られた。

わけがわからず戸惑うハツシュに、近くにいた若いハンターが教えてくれる。

「最初は誰だつて、ビビって逃げ帰るのがオチなんだ。せいぜい、虫の羽を拾って帰ってくるぐらいだな。中にはランポスを倒したつて例もあるが、怖くて剥ぎ取りどころじゃないさ。お前は初めてにしちゃあ、上出来だったんだよ」

「その通りだ。俺なんざ、最初はランポスに睨まれただけで震え上がったもんだ」

やいや、やいやとハンター達がハツシュを称え、席に座らせ、目の前に酒と料理が次々に運ばれてきた。

「こいつあ、先が楽しみだ。若い英雄に、乾杯！」

次々にグラスが掲げられていく。ハツシュは戸惑いながらも、みなみと酒がつがれたグラスを持つと、思い切り、上に突き上げた。一際大きな歓声が上がリ、集会所全体がハツシュの初勝利を祝った。

思い切り酒を呷って、ハツシュは考える。最初はみんな、自分と同じだったのだ、と。恐怖に震えながら、それでも立ち向かい、勝ったのだ。みんな、その最初の関門を知っているからこそ、祝ってくれるのだと。

ハツシュはこのとき初めて、自分がハンターになったのだと実感した。

狩人02 火竜殺し（前書き）

連載する前に、一話完結で投稿した話です。

狩人02 火竜殺し

ハンターという職業は、この世界にとって無くてはならぬ存在である。

生活を脅かす強大な飛龍に対抗するために。或いは、生活に役立つ素材を入手するために。

街の集会所には、いつも多くのハンターが集っている。

集会所の奥で一人、じつと座って黙想している老人がいる。

ハンターは職業柄、荒々しい者が多いが、その中で老人は酒を飲むでもなく、武器の手入れをするでもなく、腕を組んで座っているだけだ。

鶴のような細い身体ではあるが、その身は合金鎧バトルメイルで覆われており、背中には対大型モンスター用の武器である太刀が備えられてある。ハンターとしてはとうに、引退の時期を過ぎた年齢にあるにもかかわらず、彼は未だに、集会所に足を運んでいるのである。

「毒怪鳥ゲリョスが沼地に出現したとの情報が入りました」

集会所には、次々に各地の情報が舞い込んでくる。

「毒怪鳥か。腹ハラごなしにや、丁度良いじゃねえか」

「よし、軽く揉んでやるか」

数人のハンターが立ち上がり、意気揚々と出立する。しゅった老人はピクリとも動かず、ただ座しているのみである。

「続いて、雪山にが現れたとのことアルピナです」

「あら、素材アルビナが足りてなかったのよね」

「嬢ちゃん、俺が加勢してやろうか？」

「足手まといにならなきゃ、御自由に」

また、ハンター達が立ち上がる。それでも、老人は動かない。

「えーと、ドスランポスが森で暴れているそうですよ」

「あ、はいはい。僕、それやります！」

「はは、小僧にやいい相手だわな」

「む。今に見ててくださいよ。僕は古龍ですら、倒してみせます！」
威勢の良い若者が、片手剣ソードを担いで走り出していくのも、老人はただただ黙って見送った。

「なあ、じいさん。アンタは何も狩らないのかい？」

近くで酒を飲んでいた若いハンターが、世間話とばかりに、老人に話しかけた。

老人は微かに眼を開き、若いハンターを見る。老人とは対照的に、筋骨隆々とした体つきで、大剣ブレイドが旁らに置かれてある。

「主は何ぞ殺スシつた後か？」

老人は表情を変えず、低くしわがれた声で問い返す。若いハンターは「応」と頷き、

「昨日は岩竜バサルモスを二人で狩って、今日は三人で水竜ガノトトスを仕留めたばかりさ」

「ほう、そりやあ大したもんだ」

老人はそれだけ言って、再び黙想を始めてしまう。やれやれと若いハンターは老人に酒をついでやり、自分もさらに呷る。勝利の後の酒は、何にも勝る。

「じいさん、もう引退してんだろ。鎧着て、刀背負って、懐かしい日々を思い出しにきたんだろう。流石にその歳じゃ、無理があるつて。そうだ、明日あたり、怪鳥イャンクックあたりと一緒に狩るのはどうだ。なあに、俺ア一人でも平気だし、じいさんは死なないようにしてりゃいい。一刀浴びせてえなら、段取りつけてやるよ」

若いハンターの言葉に、老人はふむと頷き、微かに笑った。

「主は、中々の良い男だの。だが、心配には及ばぬ。僕はまだ、引退などしておらぬよ」

に、と笑う老人に、若いハンターは苦笑する。

かつては、飛龍と激闘を繰り広げていたのであろう。氣遣ったつもりだったが、あまり世話を焼くと、誇りを傷つけてしまうのかもしれない。せめて、酒の一杯でも奢ることにしようか。

老人の前に杯を置き、酒を勧めようとしたが、ふいに、集会所の窓口から先ほどもでとは違う、やや切羽詰まった声が聞こえてきた。「新しい情報です。丘に火竜リオレウスが現れました。かなり大きな個体らしく、先発したハンターは皆、潰走したとのことですよ」

若いハンターは思わず手を止め、動揺した。火竜は飛龍の中でも凶暴で、熟練のハンターでも危険とされている。ましてや、大型ともなれば、並のハンターでは尻込みしてしまうだろう。

集会所に一瞬の静寂が訪れる。数人でかかれば、倒せない相手ではないが、この集会所でも名うてのハンターは、先ほど毒怪鳥を狩りに出かけてしまったばかりである。老人の隣に座るハンターも、腕に覚えはあるが、先ほど水竜を討伐したばかりで、今から火竜を相手にするのは自殺行為であつた。

「どなたか、いらつしゃいませんか？」

窓口の女性の声に、ハンター達は俯くばかりである。

そんな中、老人は微かに頷いて、すうと立ち上がった。

「お、おい、じいさん……？」

「儂が殺る」

老人は砥石だけを腰の袋に詰めて、窓口に向かう。若いハンターは慌てて老人の腕を掴もうとしたが、その刹那、老人に一瞥され、不意に身体が痺れてしまった。

先ほどもでの、老いぼれた様子が、微塵も感じられなかったのである。眼光はあくまで鋭く、足腰は豊饒かくしゃくとしていた。とても、深い皺の刻まれた、白髪の老人とは思えない。

「あ、あの……お一人、ですか？」

「うむ。事足りる」

「で、では……」

老人はまるでランポスでも狩りにいくような、飄々とした様子であつた。

「では、ギルドへ連絡しますので、お名前を」

「……又座メタザ」

老人。否、マタザの名前を聞いて、一部のハンターからどよめき
が起きた。

一人、集会所から出て行くマタザを、呆然と見送った若いハンタ
ーの隣で、二人組のハンターがぼそぼそと話し合っている。

「マタザってえと、あの、火竜殺しか」

「ああ。あの、火竜専門のハンターだ。まさか、あんなジジイだと
は思ってたが」

「おうよ……この街に着てたのか」

若いハンターは立ち上がった。その話ならば、彼も聞いたことが
あった。

かつて、家族を火竜に殺されたことから、火竜ばかりを狩るよう
になった男がいたという。

初めての討伐の頃は、まだハンターではなく、大怪我を負いなが
らも、素人がたった一人で火竜を仕留めたという、半ば伝説じみた
噂である。

誰かの武勇伝が脚色され、伝説になったものばかり思っていた。

「じいさん……」

若いハンターは一言呟き、酒を呷った。

勝利の美酒ではなくなっていたが、清めの酒でもない。勝利の味
に、似ていた。

マタザ老人が飄々と帰ってきたのは、翌日の朝であった。

「デカいと聞いて、よもやとは思ったがの。あの銀色ではなかった
わい」

いてもらってもおられず、待ち続けていた若いハンターに、マタ
ザは火竜の鱗をひよいと投げ、再び奥の席に座る。

「じいさん、これ、どうすりゃいいんだよ」

「主にやるわ。そんなものが欲しくて生きとるわけじゃないでな」

「……もらえねえよ」

若いハンターが呟き、再び黙想を始めた老人の隣に腰掛ける。

「なあ、じいさん。俺にはもらえねえよ」

「……」

「じいさんってば」

「……」

反応のないマタザに、若いハンターは身体を揺すろうとする。だが、ふと老人から、寝息が聞こえてきて、その手を止めた。

「……じいさん。次は、俺もついてくよ」

老人の背に毛布をかけて、彼もまた、座ったまま、深い眠りにつく。

銀火竜は、流石に一人では難しいだろうから。

狩人03 ゲッドフレンド

ハンターと一概に言えど、その種類は様々である。

チームを組んで、大型の飛龍を専門に狙う者。単独で小型のモンスターを討伐する者。或いは、一人きりで飛龍に挑む、無謀な者まで。

職人肌の人物。豪快な人物。実に様々である。その中でも、アシユレイのようなハンターはそうそう居なかった。

村を拠点として、村の防衛を任されるハンターを村付きと呼ぶのに対し、街などの大都市で仲間を集い、遠方まで討伐に出かけるハンターをフリーと呼ぶ。村付きも発展のために遠方に行くことはあるが、基本的には村の意向を汲まねばならないため、相手を選ばない器用さと、覚悟が必要である。

その点、フリーのハンターは自らの意志で相手を選ぶことが可能である。苦手なモンスターの討伐は他人に任せてしまえばいいし、気ままに生きることができる。

無論、制約の多い村付きには、それなりのメリットがある。拠点となる村に住居が与えられ、村の番人。或いは英雄として村民から温かく迎え入れられる。ハンターが村にいるとなると、モンスターの素材によって村は発展して、危険も少ない。報酬にさほどの差異はないが、村人からのサポートも厚い場合が多い。

街に集うハンターはどちらかと言えば、荒くれ共と見なされがちで、煙たがられることも少なくない。住む家など用意されるはずもなく、街の中では肩身が狭い場合も多い。

故に、村付きのハンターに憧れる者は多い。あらゆるモンスターに対応できる知識や技術、経験など、求められるものが多いだけに、狭き門でもあるのだが。

そんな背景がある故に、アシュレイは街の集会所でも珍しい存在だった。

ひとつは、彼の容姿である。豊かなブロンドの長髪はいつも手入れがしっかりとされていて、長身と整った容姿は、まるで演劇の俳優である。口元はいつも爽やかな笑みを作っており、とてもハンターとは思えない。

次に、その来歴である。まだ二十歳かそのらの年齢であるにもかかわらず、彼は村付きのハンターを経験しているのである。ギルドから村付きに任命されるには、相応の実力と経験が必要である。つまり、大半の村付きはベテランであるから、二十代の前半ということだけでも異例である。その上、大概の村付きは一度、村に入ると余程のことがない限り、引退までその村で過ごす。フリーに戻るのには、腕が衰えて、村付きとして機能しなくなったハンターぐらいのものである。

ハンターという職業の横の繋がりは深い。パーティを組めば、戦友であり、背中を任せる相棒となる。当然ながら、共に出立するハンター達は、信頼という関係を大事にする。故に、アシュレイのような異端な人間は、本来は敬遠される。

だが、アシュレイという異端は、街の集会所では常に人の輪の中にいるという、異端の中でもさらに珍しい異端であった。何故か。理由の一つは簡単で、非常に優れたハンターだからである。

村付きに選出されるほどの腕なのだから、それは当然であるが、同じ村付きの中でもアシュレイは飛び抜けていると言われるほどだ。命を預ける相手は強いほうがいい。

次に、彼の天性の明るさが、異端を異端としない。我の強いハンターの中で、アシュレイは兎に角丁寧で、優しい。常に穏和な表情をしており、酒が入ると陽気になり、踊ると周囲から喝采が上がる。場の空気に馴染みやすいといえはそれまでだが、腕利きハンターは本来、プライドも高いものである。しかし、アシュレイは誰を相手にしても決して高慢にはならず、それでいて単に落ち着いているわ

けでもない。感情を露わにしつつ、それでいて周囲から好かれるという類の人間だった。

そして、最後の理由だが、これが最も大きい。

彼が扱う武器は、その種類も数も多いが、何よりも好んで使うのがライトボウガン軽弩である。これを扱うハンターは多いが、その中でも取りわけアシュレイが好かれる理由となるのは、彼の運用法にあった。

村付きのハンターであるアシュレイではあるが、その戦法はあくまでもサポートに徹するのである。遠距離からの支援が主、とでも言うのだろうか。味方が危機に陥れば、回復弾で救い、麻痺弾などで飛龍の動きを封じ、的確に仲間達をサポートする。

多くのモンスターを相手にしてきたアシュレイのサポートは、これ以上ないほどに役立つ。追いつめられたハンターが、アシュレイの弾丸で救われたことも少なくない。

ハンター達は、常に敵を仕留めることを念頭に置く。そんな中で仲間達に気を配り、さらにはモンスターに対しても並のハンター以上の働きを見せるアシュレイは、初心者にとっては初見のモンスターに対峙しても死なないように。ベテランにとっては、己の力を最大限に活かすための、これ以上ない存在だったのである。

だからアシュレイは、いつも人の輪の中にいる。集会所に顔を出せば、一斉に他のハンター達が彼を囲み、やれ雌火竜リオレイアを狩りに行くう。それ鎧竜グラシモスに付き合ってくれと、人の輪ができるのである。

そんなアシュレイにいつしかついた二つ名が、グッドフレンド。

謎に包まれた来歴を持ちながらも、笑顔で集会所に通う異端ながらも、最高の戦友なのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4239d/>

MonsterHunter異聞『狩人伝』

2010年10月10日16時32分発行